

2017年度
本願寺
仏教文化講座

第4回
著者と学ぶ『季刊せいてん』at北御堂

去る十二月十二日、本年度第四回目の「著者と学ぶ『季刊せいてん』」を津村別院（北御堂）にて開催しました。講師は、「幸せってなんだろう―悪人正機の倫理学」をご執筆中の藤丸智雄先生（総合研究所副所長）です。本誌121号掲載の「嘘は悪なのか？―自己愛から考える」をテキストに、カントの哲学思想との対比を通して、仏教・真宗の教えの持つ倫理的な発想を、わかりやすくお示しくださいました。講義の要旨は以下の通りです。

哲学者カントは、「いかなるときももう一つについてはいけない」といい、また「戦争はいかなるときも行ってはならない」といった。なぜか？たとえば戦争を行う動機として、「家族のため」という条件付きの理由（仮言命法）が語られる。その動機には自己愛（自己中心性）が含まれている。このカントの自己愛という発想は仏教の「執着」に置き換えてみることでできる。また釈尊は「わが身に引き比べ、殺してはいけない。殺させてはならない」（『ダンマパダ』）と語った。この「わが身に引き比べ」で他者の経験を想像することとはカントのいう普遍化に近い。

一方で、『歎異抄』には「善悪のふたつ、総じてもつて存知せざるなり」と人間の視点が善悪を知る力を持たないと説かれ

ている。このことをどう受けとめるべきか？「十方の衆生を救う」という阿弥陀仏の無量光・無量寿のはたらき（普遍）に出会うと、私たちは、特定の人に対する善しか行えないことに気づかされる。その気づきはまた、「忘れ去られている人、排除されている人、憎んでいる人に、どう接していくことができるか」という私たちへの問いかけでもある。

最後に「幸せとは何か」を考えると、快樂（Pleasure）は生きる上で欠かせないが、生きる意味（Meaning）も重要である。念仏者は、仏との出会いによって絶対的に承認され、生きる意味・力を与えられる。そのことが、日常の生き方における倫理的な発想の根拠になるのでは。

受講者からは、「普段とは異なった観点から真宗の教えを学べて楽しかったです」（二十代・僧侶）、「西洋哲学と仏教思想との対比が分かり易かった（倫理性）。カントの『うそ』についての仮言命法が自己愛（自己中心性）が基になっているという解説は分かり易かった」（六十代・門信徒）、といった感想を頂戴しました。

次年度も引き続き、本講座を予定しております。皆様のご来場を心よりお待ちしております。



会場からの質問をもとに質疑応答。
進行は満井秀城副所長（左）。



講義風景（藤丸智雄先生）